

# マルクス主義の現罪と原罪

戸田 徹

## Ⅰ マルクス主義をめぐる思想状況

座談会「徹底討論マルクス主義は死んだか」（竹内芳郎・廣松渉・菊地昌典・岩田弘、『第三文明』七九年六月号）が「期待はずれ」の印象を一般に与えたのは、中越戦争にまで現に帰結したマルクス主義に対して、いまここで出されるべき結論が出されていない、ということに帰因している。この点についていえば、先の四氏に限ったわけではなく、日本のマルクス主義文筆家達に共通な対応であった。むろん、いくつかのタイプはある。

第一は、「延命型」である。マルクス主義の骨格や基本的諸命題をあいまいに取り崩しながら、元来マルクス主義とは異質的・対抗的なものを際限なく取り込んで「延命」をはかる、といったタイプである。例えば、岩田弘氏の、農民共産主義やアナーキズムから第三世界の革命やエコロジ―運動までもコンミュン革命の系譜として取りこみ、近代的大工業の「プロレタリア・コミュニズム」⇨ソビエト革命と接合しようとする議論などがこのタイプである。あるいは、いいだも氏のように、「マルクス主義は生きる知恵なり、と思っている」（『季刊クライシス』一号）というところまで取り崩しながら、「マルクス死せり、マルクス万歳！」（『現代の眼』七九年八月号）という不滅信仰だけは動揺しない、というのもこの類型に入るだろう。

第二は、「救済型」で、竹内芳郎氏や菊地昌典氏のような議論はこれに分類しうる。マルクス主義の「本来の理念」なるものを現実から救済したい、あるいは、マルクス主義の現代的有効性を蘇みがえらせたい、という願望がまず先行する。そして、マルクス主義における国家論とか民族理論とか人権問題の「欠落部」「落丁」を何とか埋めてゆけば、あるいは、マルクス主義内部の諸矛盾を整理してゆけば、この惨澹たる現状の中でも「再生」は可能ではないか、それが所詮は不可能だと判明したときにはじめてマルクス主義を「根底的に廃棄すればよい」（竹内芳郎）、という議論である。ここでは、「良心派」的苦悩や悶々たる心情が表出されてはいても、マルクス主義に対する現在ただいまのところでの総体的評価は体よく回避されている。

第三のタイプは、「護教型」とでもいえるもので、廣松渉氏の議論がその典型であろう。理論と現実ギャップがあるのは当然で、「これがマルクスの理論そのものの『欠陥』に由来するわけではない」（『現代の眼』七九年六月号廣松論文）、否定的な現実から短絡的にマルクス理論の欠陥をあげつらうのではなく、「およそ体系的完成にほど遠いマルクス主義理論を継承的に展開してゆくこと」が肝要だ、というのである。無限に論点があいまいにされてゆくよりも、真つ当なマルクス護教論のほうが歓迎されるべきものだが、廣松氏の「護教」はそのよ

うなものには「およそほど遠い」議論である。

第四は、「思考停止型」で、これが最も一般的なタイプであろう。アカデミズムにおけるマルクス学者にこれが多いのは当然だとしても、マルクス主義を「生きた思想」としてきたはずの人々にもこのタイプは存在する。例えば、かつて「誰が勝ち、何が勝ったのか」（『展望』七五年七月号）という論文でベトナム革命への手ばなしの賛歌を書いた武藤一羊氏が、中越戦争や難民問題について思想の全重量をかけて向きあう作業を放擲したまま、他の国々の解放闘争の紹介や外国の論文の翻訳でお茶を濁している（『世界から』一、二号）、というのはその一例であろう。

この四つのタイプのいずれもが、七〇年代末期に露呈しつくしたマルクス主義の否定的現実から引きだすべき結論を回避している。マルクス主義が実際に経過した歴史と現に行きついた帰結以外のところに「真のマルクス主義」があると考えるのは、度しがたい自己欺瞞でしかない。このことを確認するのに七〇年代の時代経験は十分すぎるものであったはずである。

## II 「現罪」——革命と解放の篡奪

「マルクス主義は死んだか」という問いかた自体がそもそも転倒した問題設定であろう。非マルクス主義者にとつては、ソ連や中国、日共や社会主義協会がどれほど対立していようと、それらすべてがマルクス主義である。それは、非キリスト教徒にとつて、プロテスタントもカソリックもギリシア正教もすべてキリスト教であるのと同様に自明なことである。フランス新哲学派のジャン＝マリ・ブノアの『マルクスは死んだ』も最近のいいだも氏の「マルクス死せり、マルクス万歳！」も、対極的立場からのものであれ、マルクスの二度目の死亡を確認しているが、むしろマルクスは死んだところではない。カストリアデイスの言葉を借りれば次のようなものとしてマルクスは「生きて」いる。

マルクス主義の現実、第一に……十億もの男女に対して権力を行使している、全体主義的な搾取と抑圧の制度が援用するイデオロギーである。そして、それはまた、その他の国々の官僚主義的諸党のイデオロギーであり、ご承知のように、それらの諸党は第一のものと同一の制度の樹立を狙っているし、その日常の実践は一連の汚辱だ。それは、二千年以前から続いているわけではないが、しかし、二千億屯もの重圧がする。（江口幹『評議会社会主義の思想』より）

このような現実はずべてスターリン主義、あるいは修正主義であり、真の（革命的な）マルクス主義ではない、といった議論はすでにはるか以前に失効している。「第三界」という視点からマルクス主義の「革命的再生」があるリアリティをもつて語りうる時期は確かにあった。中国の文化大革命とベトナム・インドシナの革命戦争がこのリアリティを支えていた。だが、カンボジア・ベトナム・中国の社会主義間戦争かそのような「希望」に最終的にとどめをさす

以前から、中国の文革の最終的敗北と「四つの近代化」路線、カンボジアの「虐殺共産主義」、ベトナムのソ連型近代化社会主義建設、としてすでに問題は出つくしていた。「懲罰戦争」や難民放出は「第三世界マルクス主義」の悲劇的な実践的帰結であった。

他方、「第三世界」の民族解放闘争の大部分が世界政治の現実の中でソ連の勢力圏拡大として篡奪されていく、というのも七〇年代の著しい経験であった。人民革命によって成立した権力がさまざまな曲折をへてソ連圏に編入されていくという事態だけではなく、軍事クーデター型の権力移動がそのままマルクスレーニン主義国家を名のる（エチオピア、アフガニスタン等）という事例も増大している。確かに、民衆の革命的エネルギーと結合しえている「革命的マルクス主義」の勢力は第三世界には少なくはない（フィリピン新人民軍など）。しかし、マルクス主義的問題構成の中にあるかぎりどのような悲劇的なジレンマに帰結するかはすでに十分な解答がでているといわなければならない。

カストリアデイスの先の定式化で欠落しているのは社会民主主義の問題である。西ドイツの社会民主党に典型的なように、この勢力が現代資本主義の「福祉国家」管理社会」型秩序の強力な社会的支柱を担っていることは周知のことである。西ドイツ社会民主党がマルクス主義の放棄を公式に宣言したのはすでに以前のことであるが、近代的産業労働者階級の階級形成（経済的―労働組合、政治的―労働者政党）による政権獲得、というマルクス主義の基軸の一つは「正統」的に継承されている。ベルンシュタインはマルクス主義を「修正」したわけではなく、「先進資本主義国」の組織労働者の中にマルクス主義が根つきうる核心を明るみに引きだしたのである。「マルクスレーニン主義」が〈近代化〉の問題状況におかれた地域における「正統」的系譜であったとすれば、「マルクス社会民主主義」は市民社会の成熟の上に成立するもう一つの「正統」的系譜であった。昨今のユーロ・ジャップ・コムニズムなるものが、スターリン主義的伝統を温存しつつこの「マルクス社会民主主義」におおざとと転換するものであることも明瞭であろう。

最後に、「新左翼」的マルクス主義はどうか。六〇年代後半の青年・学生の急進的反乱とまがりなりにでも結合しえていたこのマルクス主義潮流も、七〇年代に入って急速な風化・解体と内的腐朽をとげていったことは、他ならぬ我々自身の経験であった。今日では、既成左翼・既成労働運動に対する無力な左翼反対派・左翼的補完物にとどまるか、テロリスト的「異端」（西ドイツ赤軍、イタリア「赤い旅団」など）に自己純化するか、の選択しか本質的には残されてはいない。

マルクス主義の現実はこのようなものであり、そのようなもの以外に「真のマルクス主義」が存在するわけではない。このマルクス主義的現実には、〈革命〉と〈解放〉をたえず篡奪し、抑圧し、これと根底的に対立する物質的・イデオロギー的な諸体系である。そして、まさにそのようなものとして、マルクス主義は生きており、なお強大な活力をもって拡大しているのである。

二十一世紀にスターリン主義的「收容所国家」が全世界を覆う、というグリユックスマンなどの逆ユートピアを決して一笑にふすわけにはいかない。あるいは、ソ連の強引な拡張主義と

米帝の過剰反応の帰結として米ソ核世界戦争かきわめて近い将来に勃発するという可能性が、かなり真面目な議論として提出されている（佐藤進『新しい社会主義をめざして』）。

大国間の均衡がまがりなりにも維持された場合でも、諸矛盾はすべて「南」にしわよせされ、複雑怪奇な「南々戦争」エチオピアソマリア戦争のような）の頻発と全地球的な生態学的危機の昂進、という事態が充分予想されうる。いずれにせよ、〈革命〉と〈解放〉が真の活路をみいだしえないならば、二十一世紀への展望はさほど明るいものでない。そのような活路をみいだしてゆくためにも、この一世紀半の革命と解放の運命となったマルクス主義について根本的な決着をつけておかねばならない。マルクス主義が〈革命〉と〈解放〉の反対物に自己転変したことの根拠を、偶然な外的要因にもとめるのではなく、その思想の内的な帰結として明らかにせねばならない。マルクス主義の「現罪」への批判は、その「原罪」への批判として徹底されなければならないのである。

### III 「原罪」——産業主義・国家主義・全体主義

問題提起としていくつかの論点を簡単に提出しておきたい。

#### ①近代社会主義の完成

「近代社会主義」というタームでとらえてみるとマルクス主義の歴史的位置が明瞭になる。「近代社会主義」とは、さしあたり、〴〵近代の枠の中での資本主義の否定〴〵あるいは〴〵近代の立場での資本主義の否定〴〵としての社会主義、といえる。マルクス主義はこの近代社会主義のもつとも首尾一貫した完成形態であった。マルクス主義が社会主義運動の中で覇者としての地位をかちえたのは、〈近代〉の力を自らの力として最も強力に組み入れたからであった。エンゲルスは『ユートピアから科学へ』の冒頭で、近代社会主義は、内容的には労資階級対立と生産の無政府性の認識の産物であり、理論的形式からいえばフランス啓蒙思想の首尾一貫した継承であった、と述べているが、期せずしてマルクス主義の「近代社会主義」としての本質的性格を語っている。すなわち、産業革命と市民革命の継承・完成としての社会主義である。

マルクス主義が継承したもう一つの近代の革命は、ドイツ古典哲学の観念革命であった。ヘーゲルを頂点とするこの観念革命は産業革命と市民革命を観念的普遍性の中で総合し合理化するものであったが、この普遍主義（理性主義的全体主義）の「唯物論的転倒」が産業革命—産業主義、市民革命—国民国家（国家主義）のマルクス主義的継承に特有な、全体主義的性格を付与することになった。産業主義・国家主義・全体主義を一つの思想のうちに統合しえた（それが整合的であったかどうかは別として）ところにマルクス主義の最も強力な生命力が存在していた。

#### ②産業主義と資本主義批判

マルクス主義の核心が資本主義批判にあることは疑いないし、近代社会主義の諸潮流の中で

他に類を見ない高度な理論的水準であったことも事実である。しかし、その資本主義批判の内実、というよりも、マルクスの資本主義批判が、資本主義批判でしかなかったことに、マルクス主義が革命と解放の反対物に転化せざるをえなかった根拠がある。

マルクスにおいて、資本主義（産業革命）が作りだした機械制大工業と普遍的交通（広がりつくした分業）を新社会の物質的土台として継承する、という命題は初期から晩期まで一貫している。マルクスは、機械制大工業が資本主義に独自の生産様式（「質料的生産様式」という用語もつかっている）として形成されたとまでおさえながら、そのような実体は個々の形成要素に分解すれば社会的形態規定とは無関係な質料である（「機械は鉄でできている！」）というまことに素朴な発想から、それを新社会の物質的条件として肯定し、継承・完成しようというのである。だがその質料的構成自体が資本主義的關係を内化している。いや、正確にいえば、それは、資本主義的關係を内化するものとして生まれながら、資本＝賃労働關係に還元しえないもの、資本＝賃労働關係がたとえ制度的に解消されても生き残り、増殖する実体的な關係＝構造である。これをイバン・イリイチ風に「産業的生産様式」と呼んでもよい。それは人間相互關係においてはテクノクラート支配に、対自然關係においては生態系破壊に行きつく以外にないものである。コンビナートや原子力発電は産業革命に発する生産力の構造の必然的な帰結である。今日のマルクス主義国家か「原子力帝国（アトム・シュタート）」の最も熱心な推進者であるのは、マルクス自身に根拠をもっている。

他方、マルクスが引き継ごうとした普遍的交通＝「広がりつくした分業」の基盤の上にコンミュン社会をつくろう、ということはそもそも解決不能な問題設定であった。そのような問題設定は、国家権力による上からの集産化か、市場機構による調整の承認、あるいは両者の組み合わせ（「計画と市場」！）としてしか現実化されえなし。この点でも、スターリン主義と社会民主主義は同等の資格をもった「マルクス正統」である。

マルクスの資本主義批判は産業主義の肯定・継承の立場からするそれであり、マルクス主義的コミュニズムか反コンミュン主義に帰結せざるをえない「物質的土台」もここにある。マルクスが資本主義内部に成熟する新しいゲマインシャフト＝共同体の萌芽として『資本論』の中で語りえたのは株式会社（！）くらいのものだという「竜頭蛇尾」もこの産業主義継承の立場の論理的帰結である。

### ③ 革命と解放を拓く次元

マルクスの資本主義批判は、資本主義とともに（資本主義の中から）生まれながら、資本主義よりも深い層を構成している産業主義の肯定・継承であったが、産業主義よりも更に深い第三の層が存在する。人間的欲求の存在論的次元と呼んでもよいだろう。資本主義に即していえば、商品への欲求ですら単なる物質的有用性に還元しえない象徴的次元をもっている、という点である。マルクスの「商品の物神性」論が完全に見落した「もう一つの商品物神性」、あるいは、ボードリヤールのいう「象徴交換」などの論点は、経済的事実性からの超越の欲求と志向か発現し、同時に、それらが商品の購入として資本主義市場の枠内に回収され、再組織され

ていく過程を示唆している。元来、象徴や意味として構成されている欲求・必要・有用性を物象化するのには資本の運動論理であるが、それはこのような次元における完結しえない不断の過程としてのみ存在する。

マルクスが「資本論」の冒頭で、人間的欲求を物質的財の有用性との関係に切り締め（商品の使用価値）、「これらの欲望の本性は、それか例えば胃袋から生じようと、幻想から生じようと、なんら事態を変化させない」として、「心の欲望」を「幻想」に等置して事実上「胃の腑の欲望」に還元している。その上で使用価値は交換価値の質料的担い手たる限りでの位置か与えられる。このような、人間的欲求に対する三重、四重もの抽象化⇨物象化は、資本の運動論理の理想化である。

この第三の層は、産業主義⇨資本主義（「社会主義」でも同じ）から超えてようとする志向を不断に回収し、もつとも深いところでそれらを支える力が作用する次元であると同時に、産業主義⇨資本主義（「社会主義」）を根底から突きやぶる〈革命〉の根源的な力と〈解放〉への志向が生成する次元、この二つの力が真に相克する次元である。マルクス主義は、その資本主義批判が産業主義を肯定・継承するものであったことによつて、この「第三の層」に無自覚なばかりか、そこから発する〈革命〉と〈解放〉への最悪の対立物となったのである。

マルクス主義的知の全体主義（普遍思想）とマルクス主義国家のウルトラ化された国家主義がこの「第三の層」の問題と密接不可分な関係にある、と考えているがこれは討論にあずけることにして、これで問題提起を終わりたい。

（討論のためのレポート）